

藤袴卷末をめぐって

— 玉鬘物語の世界 —

森 一 郎

藤袴卷末において、玉鬘は、尙侍として出仕することが確定的である。六条の院の花と喧伝された玉鬘をめぐる求婚譚の行方は、玉鬘物語のサスペンスとして盛り上がったのであるが、ここにその運命は決着し、求婚譚はフィナーレを告げるに至った、と読者は思

う。卷の末尾に「女の御心はへは、この君をなむ本にすべきと、おとどたち定めきこえたまひけりとや」とあるのは、尙侍出仕と決まった女主人公への讃辞として、求婚譚フィナーレの印象を与えると言えよう。多くの公卿達から続々とうらみの手紙が来る、というのも終幕を思わせるに十分である。ところが正に急転直下、真木柱巻の頁をめくると、既に玉鬘は髣髴のものとなっている。読者は呆然

となる。

藤袴巻末において作者は、求婚譚フィナーレを印象づけ、真木柱巻冒頭の意想外な事態によって読者を驚かせる効果を十二分なものにしようとしている、という事は、池田亀鑑博士も示唆されており、(註一) 玉上琢弥先生も言われるところである。

が、単に、読者を驚かせるための技巧というだけでは、説明が不十分であり、真に作者の技巧を説明したことにはならないであろう。尙侍出仕だと思っていたものが、鬘黒の妻になってしまったという事で驚く、という程度の説明では、読者の驚きなるものが十分掘り下げて解明されたとは言えないであろう。物語の世界を掘り下げることによって、その読者の驚きなるものの具体的内衷——言いかえれば読者を驚かせようとする作者の技巧——を十分に説明しなくてはならないと考へる。

読者の驚きとは、いかなる驚きであったのか。それを明らかにするために、求婚譚フィナーレを告げる藤袴巻末の、玉鬘尙侍入内の内衷を分析することからはじめねばならない。真木柱巻冒頭の意想外な事態による驚きとは、藤袴巻末の時点において読者が予想し期待したものが急転してくつがえされる驚きである。故にその驚きを説明するためには、予想され、期待されたものを解明しなくてはならないわけである。藤袴巻末の時点で照明をあて、玉鬘尙侍入内確定の内衷を分析するゆえんである。

したがって、私が、本稿で考えようとするのは、藤袴巻末の時点において読者が享受していたものの詳細を分析することによって、真木柱巻冒頭における読者の驚きを計量し、その読者の驚きを計量した作者の手のうちを解明するにあるのだが、その考察・分析をき

わめることによって、玉鬘物語の世界についても言及したいと思つている。というより、本稿の窮極の目的は、玉鬘物語の世界を解明するにあるのであって、この拙稿はその一部なのである。

二

そもそも、玉鬘をめぐる求婚者の中で本命と目された螢宮が、しりぞけられて、玉鬘が尙侍入内と確定したのは源氏の意志による。「人柄は、宮の御人にて、いとよかるべし」(藤袴巻一六四頁。頁数は吉沢義則博士著対校源氏物語新釈による。以下同じ。)と源氏自身似つかわしいと認めた螢宮と玉鬘の一对であったのだが、源氏は、玉鬘の尙侍入内をとり決めた。源氏は、玉鬘の入内後の立場の困難さもよく分つており、(行幸巻)(註二)、玉鬘が宮仕をあまり希望していないこと、兵部卿宮に心ひかれていたことも知っていた。(藤袴巻)(註三)。そして、宮の配偶者に似つかわしいことも認めていながら、(前述、藤袴巻一六四頁、「人柄は、宮の御人にて、いとよかるべし」)、玉鬘の尙侍入内をおしすすめたのであった。その決定のしかたは強引と言いつく、源氏が玉鬘を尙侍として出仕させようとする態度には、源氏の意志、気持だけが強く浮き出ている、と言わねばならないのである。源氏が夕霧に対し玉鬘の尙侍入内をとり決めたことを語った時、夕霧は、玉鬘入内後の立場の困難さにふれ、螢宮の折角の御志を無にするのはいかゞなものかと思ひを述べた(註四)、それに対して源氏は、螢宮と玉鬘は似合わしい、と言ひ、そう言ひながら、しかし宮仕に出てもふさわしい、というような答え方をしている。これは、夕霧の意見に対する答えになっていないのであって、夕霧の懸念——入内後

の立場の困難さ——にも答えていないし、蜷宮のことは似合わしいと認めて、たゞそれだけですましてしまっている。ここには、たゞ、玉璽を侍入内させることにした源氏の意志、気持だけが強く出ているのである。

自己自身も気づき、夕霧の懸念をも認めているべきはずの源氏が、その懸念にいわざわざ目をつむるかのようにな事をしすめる態度は、理性的というよりは情念的というべく、ここには、夕霧に答え得なかつた情念的な理由がかくされて見られる。その核心をつくものが内大臣の言葉であったのだ。玉璽を侍侍として入内させようとする源氏の意図を「おほぞうの宮仕の筋にらうろせむとおほしおきつる、いと賢くかどあることなり」(藤袴巻一六六頁)と内大臣は見抜いた。思い当てられて、源氏は気味わるく思う。「げに宮仕のすぢにて、けざやかなるまじく紛れたる覚えを、かしこくも思ひ寄りたまひけるかな、と、むくつけくおほさる。」(藤袴巻一六六頁)。

「おほぞうの宮仕の筋」とは侍侍出仕を指している。されば、侍侍出仕であれば、「らうろせむ」とすることが可能であるということになる。それは何故か。侍侍は女御や更衣などと違って原則として天皇の妃でないからである。侍侍は、内侍所(温明殿)に仕える女官なのである。だから、玉璽自身がのちにそうしたように、髷黒大将の妻でありながら同時に侍侍の職に就くということも可能であった。髷黒の場合、玉璽を離すまいとしたために、玉璽は侍侍の職を自宅勤務するという次第であった。そんなことまで可能であつたといふことは、一に侍侍が妃ではないといふことによる(註5)。

侍侍は女御や更衣などと違って原則として天皇の妃ではないから、

「ある程度の自由がきく」(註6)、時々は違ふこともできるのである。

故に、玉璽を女御、更衣としてでなく侍侍として入内させることのみが、内大臣が見抜いたような点に於つたことは十分考えられるのである。

玉璽を女御、あるいは更衣として、秋好中宮や弘徽殿女御と立ち並ばせようとは考えなかつたのは、夕顔という劣り腹であることもふさわしくない理由の一つであらうし、また、それではいろいろ具合のわるいことが起こる——秋好中宮や弘徽殿女御との対立、就中、弘徽殿女御との対立など——からであらう。けれどもそれらにまして、最大の理由は、内大臣が見抜いたような点に於つたのだと考えてよいであらう。

源氏は秋好中宮に対してもいまだに気を引くようなことをしてみるが、さすがに中宮という地位を考えてそうあらわには懸想の情を示さないといふ次第なのだ(蜷巻)(註7)、まして人柄の現代式であるこの玉璽を侍侍としてのちどりの態度に出るか、さすがに蛇の道は蛇で、内大臣はよく見抜いたのである。源氏は、髷黒のように玉璽を自宅勤務させて六条院におらせるといふようなことは考えなかつたであらうが、時折、六条院に下らせては逢瀬を楽しむといふ図を描いたのであらう。

玉璽を侍侍として出仕させようとする源氏の意図がかくのごとき次第であるから、玉璽にとって侍侍入内は、秋好中宮や弘徽殿女御に対する気がねばかりでなく、奥に源氏とのやまじき關係をも内包する、困難な複雑な立場を要求されることであつたのである。

このように分析してみると、求婚譚フィナーレとは言つても、六条院を舞台とする色好みの物語は終焉をとげるに至つたとは言えな

いのである。いな、むしろ色好みの物語は、いっそ補充される勢いであり、物語は、六条院を舞合とするこの色好みの物語は、女主人公玉鬘の将来と共に今なお息づき生き続けようともしていた。

藤袴巻末の時点において、読者が読みとっていたものは右のごときであったことを知らねばならない。

されば藤袴巻末において、読者は、今後もしつづき生きつづけようとする源氏と玉鬘の色好みの可能性・発展をサスペンスとして期待するわけなのである。こゝにおいて読者は、それまでの六条院での、源氏と玉鬘の關係をあらためて想起するであらう。そして、尚侍入内後、源氏と玉鬘はどうなるだらう、というサスペンスは盛り上がるのである。

藤袴巻末は右のように理解されるべきであり、このように盛り上がったサスペンスが、真木柱巻の意想外の事態によってくつがえされる、その読者の驚きを思うべきなのである。

三

藤袴巻末が右のように理解されるとすれば、「女の御心ばへは、この君をなむ本にすべき」という巻の末尾の、玉鬘に対する源氏と内大臣の語り、讀辭は、どういふ意味となるのであろうか、というところが、あらためて考察の対象となってくる。単に、求婚讀辭イナールを印象づけるものなどとすまされないのである。そうした技巧的措辭たることを指摘すると同時に、この讀辭の物語形象としてのリアリティを分析しなくてはならないと思うのである。

「女の御心ばへは、この君をなむ本にすべき、と、おとどち定めきこえたまひけりとや」と、それは源氏と内大臣の語りであっ

たことに注意しよう。玉鬘に対し、かような讀辭を与えた兩人の、

玉鬘に対する態度はどうであつたらう。前述したごとく、玉鬘の尚侍入内について分析してみても、養父源氏の「あだけたる」態度を見るのであるが、そもそも、玉鬘が六条院に迎えられるまで、源氏の玉鬘に対する態度には軽いものがあり、「あだけたる」ものであった。「好色者どもの心つくさするくさはひにて、いといたりもてなきむ」(玉鬘巻三八九頁)と、源氏が右近へ語ることばにあまりに明瞭に言いつくされた感があるのであるが、源氏の玉鬘に対する態度は一貫して軽く、慰みの意図に終始していると言つてよい。后にと心ざす奥子明石姫君に対する態度とは全く異質であり、中宮である秋好に対する態度とも相違していたのである。一方、実父内大臣はどうであつたか。彼は絶えず弘微殿女御を第一に考えるあまり、実父として消極的な態度に終始している。玉鬘が入内する予定となるや、弘微殿女御に対して気をつかい(行幸巻)(註8)、のちに鬘黒のものになつてしまったときは、「玉鬘をかわゆくは思ふけれど、弘微殿女御をさしおいてどうもしてみようがないことだから」と、鬘黒の妻になつたことを喜んでおり(真木柱巻)(註9)、鬘黒の妻になつたことをよしとする彼の見解自体は現実的、分別的で、そういう点では実に正鵠を得ていると評すべきものであるが、弘微殿女御に気をつかい玉鬘に対する消極的な態度を露呈したことばであることに注意したいのである。このことばは、内々で言つたことだから彼の本心と見てよいのである。——「忍びて宜ひけり」(真木柱巻一七六頁V)——。

養父実父ともに、父であつて父でないような、実意のない態度で玉鬘を取扱つていふと言わなくてはならない。その兩人が玉鬘を

「女の御心ばへはこの君をなむ本にすべき」と語り合つたといふのである。われ／＼はその情景をどのように想像すべきであらう。殊にも玉鬘の侍入内を、「おほぞうの宮仕の筋にらうらうせむ」とする源氏の意図だと見ている内大臣はどんな表情であつたらう。

「女の御心ばへ」というかたいことばではあるが、男性との交渉におけるそれであることに尽きるのでと言いつつ、父であつて父でないこのふたりの色好みたちの好色的なふくみ笑いがこの讃辞の底にかくされているような気がするのである。もつとも、この讃辞は、玉鬘の侍出仕確定に際しての養父実父の語り合いであつて、侍出仕を確定するに至つた玉鬘の、近江の君と対照的にきわだつてすぐれた資性に対する讃辞であることには相違ない。しかし、前述してきたような観点からするとき、この讃辞をそれだけで読み過ぎすべきではあるまいと思ふのである。そうした言わば表面的なきれいごとの世界の底にひそむ表現の深層とでもいふべきものをのぞいてみたいのである。

この讃辞を読んで読者は、六条の院における玉鬘の見事な振舞、資性を思い浮かべるであらう。わけでも侍入内の件に示した玉鬘の思慮分別、自覚の見事さを。藤袴巻のはじめの「内侍のかみの御宮仕の事を、誰も／＼そのかしたまふも、いかならむ、」にはじまる玉鬘の自覚は、けだし深刻なものがあり、まことに称讚に値する見事なものであつた。また、養父源氏のあだめいた振舞に對する応接をはじめ、求婚者たちに対した態度も見事であつた。自己の弱い立場を自覚して源氏にうとまれないようふるまうと同時に、源氏に自制を求めるし、やんとしたところも見せた玉鬘の女性像。読者に

はこの讃辞が十分に正当性をもっていることがわかる。

しかし、私の注意したいのは、この讃辞を口にはせた当の源氏や内大臣はどうであつたかということである。そのことが明らかにされることによつて、「大臣たち」——源氏や内大臣——の言おうとした玉鬘への讃辞の内実がわからうといふものである。

玉鬘が侍入内の件で示した思慮分別とは次のごときであつた。「親と思ひきこゆる人の御心だに打解くまじき世なりければ、ましてさやうのまじらひにつけて、心より外にびんなき事もあらば、中宮も女御も、かた／＼につけて心置きたまはば、はしたなからむに、わが身はかくなきさまにて、何方にも深く思ひとどめられたてまつる程もなく、浅き覚えにて、ただならず思ひいひ、いかで人笑へなるさまに見聞きなさむと、うけびたまふ人々も多く、とかくにつけて、やすからぬ事のみありぬべきを、物おぼし知るまじき程にしあらねば、さまざまに思はし乱れ、人知れず物歎かし」（藤袴巻一五七頁）とあるように、もしも帝の御寵愛を受けるようなことになれば、秋好中宮や弘徽殿女御から心隔てせられようし、自分は源氏にも内大臣にも特に大切にされている身の上でもないのだから、そうなればどうなるかと分別するのであつた。まことに見事な分別であり、われ／＼は限りなく称揚するもののだが、源氏や内大臣はその点を称讚しているのであらうか、といふことを問題にしないでなくてはなるまい。

物語の本文にはその明徴はなく、そして、むしろ、前にも述べたごとく、侍入内に至つた玉鬘を、近江の君とも思いくらべながら、称讚しているのであり、侍入内をためらつた思慮分別をほめてゐることはないのである。源氏は、玉鬘が入内をためらう理由

を、螢宮にひかれてゐるからだろうと思つていたようなのである。「この宮づかへを、しぶしぶにこそ思ひたまへ。宮などのれんじたまへる人にて、いと心深きあはれをつくし、いひ悩ましたまふに、心やしみたまふらむと思ふになむ心苦しき。」(藤袴卷一六三頁)と、源氏は夕霧に語っている。玉鬘が螢宮に心をひかれるようになったのも源氏の演出によるのであつて、かの螢の光に照し出された美しい夜の出会いを用意し演出したのは源氏である。そして、「御けはひなどのなまめかしさは、いとよく大臣の君に似たてまつりたまへり。」(螢卷五一頁)と、侍女たちの讃歎を得た螢宮は、やがて姫君玉鬘の心を領することとなる。玉鬘が、理想の人光源氏の魅力に次第に開眼していった目で、その光源氏にそっくりの優美な螢宮の魅力をとらえたのは自然であつた。「活けみ殺しみ」(螢卷五二頁)の指導をし、恋の演出に興じた源氏には、そうした玉鬘の女心が手にとるやうにわかつていたのだろう。

玉鬘の女心をそんなふうに見てとつてゐる源氏であればこそ、自信をもつて冷泉院に心ひかれたであろう玉鬘の心底をも見とおすのである。冷泉院の大原野行幸を玉鬘に見物させたのも源氏の演出である。そうすれば必ず玉鬘は冷泉院に心ひかれ、尙侍出仕を喜んで受けるだろうという計算であつたのである。

玉鬘は、大原野の行幸の折押した帝を「なずらひきこゆべき人なし」(行幸卷一二四頁)と、「御興の内よりほかに、目移るべくもあらず」(同右頁)という有様で、「たぐひなうおはしますなり」と讃歎した。源氏が計算したとおり、玉鬘は冷泉院に心ひかれ、憧憬した。

源氏のこの点に関する自信は確乎たるものがあるようである。彼

は「若き人の、さも馴れ仕うまつらむに慍る思ひなからむは、うへをはの見たてまつりて、えかけ離れて思ふはあらじ」(行幸卷一八頁)と紫上に語り、玉鬘に対して入内を「絶えず勧めたま」うたのである。(行幸卷同右頁)。源氏は夕霧にも彼の確信めいた主張を語っている。「大原野の行幸に、うへを見たてまつりたまひては、いとめでたくおはしけりと思つたまへり。若き人は、ほのこにも見たてまつりて、えしも宮仕の筋、もて離れじと思ひてなむ、この事もかく物せし」(藤袴卷一六三頁)。かくて、「螢宮との一對もよい、が、冷泉院への宮仕もふさわしい」(藤袴卷一六四頁)と夕霧に語るのだが、螢宮よりいっそう優美で立派な冷泉院の宮仕に玉鬘が心ひかれぬはずがないという源氏の確信から來てゐることは、源氏のことばの証明するところである。この確信は誤まりではない。しかし、その確信の太いなるあまり、源氏は玉鬘の秘められたる心の葛藤、思慮分別、自覚を見のがしてしまつたようだ。彼は「苦い女は……」とたかをくくつてゐる。故に玉鬘のたぐいまれな自覚に気づかなかつたのである。

したがつて、源氏が玉鬘を「女の御心ばへは、この君をなむ本にすべき」と称讚したといつても、彼は玉鬘の尙侍入内の件で示した自覚ある態度を称讚したわけではなかつたのだといわねばならない。

玉鬘のそば近くにいた源氏でさえこのとおりである。父とは名のみ内大臣にはもとより玉鬘のかような心の奥底がわからうはずがない。

四

とすると、「大臣たち」が讃歎した玉鬘の「心ばへ」とは、何を

指すのか。それは、源氏に対する関係や求婚者たちとの交渉に見せ
た彼女の振舞、資性にほかならないと考えられる。

源氏の玉髪に対する愛執の情念は、事ごとくにいたってなお燃えて
いること前述したごとくであるから、それまでの玉髪との美しき感
いのひとこま／＼が、源氏の情念を刺戟していたことが想像されよ
う。内大臣との語らいは、たゞ一句この讃歌の辞をもってしかあら
わされていないけれど、かの雨夜の品定め再現にも似た女の品定
めを、この一句の背景、氷山の地肌とををつぶさに語ったというの
いであらうか。源氏が玉髪とのことをつぶさに語ったというのでは
ない。女に関する語らいがあつて、玉髪にはこの讃辞一つが語ら
れた、というだけで十分であらう。源氏には無量の追想があらう
し、内大臣には源氏の追想を追う目がある。「玉髪は女の心構えの
お手本だね」——兩人の語らいは一致し、無量の感銘があつた。

源氏のことば（讃辞）にはそれまでの玉髪との思い出が裏づけに
なっていることは言うまでもない。それは後年、女三の宮と柏木の
密通を知ったとき「右のおとどの北の方（玉髪）の、取立てたる後
見もなく、をさなくより物はかなき世にさすらふるやうにて生ひ出
でたまひけれど、かど／＼しくらうありて、我も大方には親めきし
かど、憎き心の添はぬにしもあらざりしを、なだらかにつれなくも
てなして過ぐし、……」（若菜下巻九八頁）と回想し、玉髪の態度
を称揚したのと同様の感慨であつたらう。（註10）「憎き心の
添はぬにしもあらざりしを、なだらかにつれなくもてなして過ぐ
し」、今、「おほやけ事などにもおほめかしからず、はか／＼しく
て、うへの常に願はせたまふ御心にはたがふまじき」（藤袴卷一六
五頁）と源氏の認める資質によって、晴の侍入内へと落着するに

いたつた玉髪への讃歌の思いであつた。

源氏との関係を「人笑へなるさま」（藤袴卷一五七頁）にせず、
事なく過ごして、今、侍入内へと身を落着せしめるにいたつたこ
とは、玉髪にとつて、入内後の不安はあるにせよ、「人笑へなるさ
ま」にしなかつた過去への満足をとまなりものであつたはずだ。玉
髪が、源氏との関係を世間に對して恐れたことは、次のような世間
への畏怖感・不安となつている。「人に似ぬ有様こそ、遂に世語り
にやならむ、と起き臥しおぼし悩」んだり（螢卷五一頁）、「わが
身はかくはかなきさまにて、何方にも深く思ひとどめられたまつ
る程もなく、浅き覚えにて、たゞならず思ひいひ、いかで、人笑へ
なるさまに見聞きなきむと、うけびたまふ人々も多く、とかくにつ
けて、やすからぬ事のみありぬべきを、物おぼし知るまじき程にしあ
らねば、さま／＼に思ほし乱れ、人知れず物歎かし」（藤袴卷一五
七頁）というよりな世間への畏怖感・不安である。だから「このお
とど（源氏）の御心ばへの、むつかしく心づきなきも、いかなるつ
いでにかは、もて離れて、人の推し量るべかめる筋を、心清くもあ
り果つべき」（同右頁）と悩んだ事を一応解決したような満足感
が去来してははずだと思ふのである。もちろん、既に述べたよう
に、玉髪の侍入内の内奥は、より複雑な立場を玉髪に要求するも
のであつたのだが、藤袴卷末の時点においては、正身玉髪は、右に
述べたような満足感を抱いたと見てさしつかえなからう。

そつういふ玉髪の満足感とも照応して、それまでの玉髪の自分（源
氏）に對する態度を、源氏は満足と称讚の氣持をもって回想してい
たに違ひない。

一方、「おほぞうの宮仕の筋にらうろせむとおぼしおきつる」

と源氏の心底を判定している内大臣は、この讃辭の深層に何をこめていたであらう。内大臣は、源氏が玉鬘の尙侍入内の方針を固めて事の真相を告げた時（行幸巻）、既に早くも源氏の玉鬘との關係を次のように想像している。「尋ね得たまへらむはじめを思ふに、さだめて心清ら見放ちたまはじ、やんごとなき方を懼りて、うけばりてそのきはもてなすぎ、さすがに煩はしう物の聞えを思ひて、かく明かしたまふなめり」（行幸巻一四三頁）。例の雨夜の品定めどころ、色好みのライバルとして共に相知り合う仲であつたふたりである。内大臣は自信をもつて源氏の行為を推量したのである。彼は、源氏と玉鬘の關係を潔白なものではないと見ている。その彼が、「女の心構えはこの玉鬘をお手本にすべきだ」と相和して言つたとき、もちろん表面の意味は、近江の君などとくらべてきわだつてすぐれた資性の持主である玉鬘が尙侍入内の榮譽をになうことに対する讃辭であるには相違ないが、やはり、源氏との關係における玉鬘の振舞を想像していただと考えられる。

源氏にとっては回想が、内大臣は、その回想を追う想像が、この讃辭の語り合われた場景におけるふたりの、表現の深層にある心象瓜分というものであつたらう。

五

その心象風景のくま／＼は源氏の最もよく知るところであるが、われ／＼読者も、源氏の回想の風景をあとづけることができるようである。

その回想のひとつ／＼は、まことに色好みの世界と言いつへく、源氏物語全篇の中で、とりわけ官能的世界を形成している。

源氏がはじめて玉鬘に思慕の情をほのめかしたときの情況は、次のようであつた。「……なほえこそ怒ぶまじけれ。おほし疎むなよ」とて、御手をとらへたまへれば、女、かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたて覚ゆれど、おほどかなるさまにて物したまふ。袖の香をよそふるからに橋のみさへ儂くなりもこそすれむつかしとおもひてうつぶしたまへるさま、いみじう懐かしう、手つきのつぶ／＼と肥えたまへる、身なり肌つきのこまやかに美しげなるに、なかくなる物思ひ添ふ心地したまひて、今日はすこし思ふ事聞え知らせたまひける。女は心憂く、いかにせむと覺えて、わななかるる気色もしるけれど……」（胡蝶巻三八頁）。

かなりあらわな官能的描写だと思つるのである。「御手をとらへ」というのは、端的な書き方である。女は「おほどかなるさまにて物したまふ」。手を取られたまふ、じつとしているのである。「むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつかしう、手つきのつぶ／＼と肥えたまへる、身なり肌つきのこまやかに美しげなる」という描写は、すべて源氏の感覺とおして叙されたものである。彼の視覚が吸いつけられている、その視線のあとを追つて叙していく手法をとっていることがわかる書き方、文章である。「むつかしと思ひてうつぶ」姿勢が「いみじうなつかしう」感じられた。親しく慕わしい愛執の情をそよつたのだが、どうも精神美的というより肉感的感能的感覺にもとづいていような感じである。「手つきのつぶ／＼と肥えたまへる」は視覚と見てもよいが、「手をとらへたまふ」うた觸覚ともとり得る。恐らく両方であらう。「身なり肌つきのこまやかに美しげなる」は、女の体つき、肌のすべ／＼した、きめのこまかさを見ているのである。これはみだらといつてよい、中

年の色情的な目である。「ごまやかに」とは、きめのごまかさをいうのだと思うが、北山露太氏の源氏物語辞典に「精巧なるさま。精良なるさま」と注し、「人工ノ物ニ限ラズ、人ノ容姿ノ形容ニモ、細やかにヲ用ヒタルハ、造化ノタクミヲ擬人シタルナルベシ。」と説明されているのを参照すれば、女の体つき、肌のきめのごまかさ、まさに造化のたくみというべき精巧、精良なるものであったということになる。まことに官能的感觉的な描写であり、その濃厚さは、狭衣など平安後期の作品に近いくらいあらわなるものがあるといつてよい。

かくて、「なつかしき程なる御ぞどものけはひは、いとよう紛らはしすべしたまひて、近やかに臥したまふ」（胡蝶巻三九頁）うたのである。

回想する源氏の思い出の風景には、第一に、こんな灼き付いたようなシーンがあったのである。

その後、「繁く、渡りたまふ」うて、次第に玉髪は、源氏の理想性に開眼させられていったようである。「思ふ事なくば、をかしかりぬべき御有様かな」（螢巻五三頁）と思うようになり、やがて「御こと教へたまふにさへことつけて、近やかに馴れ寄りたまふ」源氏に對し、玉髪は「さるべき御いらへも、なれなれしからぬほどに聞えかはし」（常夏巻八〇頁）、信頼の情を持つに至った。

「やう／＼なつかしううちどけきこえたまふ」（篝火巻九七頁）ようになり、「御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまひ、御髪の手当り」をいとしんだ（篝火巻九八頁）篝火の夜のことも美しくも忘れがたい回想のシーンであるに違いない。

例の野分の日に、夕霧の目撃した、源氏の玉髪に對するたわむれ

姿は「ふとこころ離れず」（野分巻一・一五頁）とある。ふとこころに入ればかりに抱いているのである。まことに「事と馴れ／＼しき」（野分巻一・一六頁）情況であった。

「はじめこそむくつけくらたてくも覚え」（常夏巻八〇頁）た源氏に對し、次第になつていった玉髪の女性像をあとづけることができるのであるが、紙幅の制限に迫られ、まことに概略、指摘にとどまった。

が、かような玉髪物語の色好みの世界、官能描写から、この物語の、伝承的な色好みの物語の系譜における高い位置づけが可能であることを、われ／＼は知るのである。この物語は、宿世思想に貫ぬかれた、精神的要素において、従前の物語と異質な卓越した世界を形づくっているのであるが、従前の昔物語、伊勢物語や交野少将物語、平中物語など色好みの物語、すなわち伝承的な物語の系譜における、物語作者としての力量においても高く評価しなければならぬことを知るのである。

本稿においては、その玉髪物語の色好みの世界、性格についての分析に多くを残したが、玉髪の尙侍入内の内実を分析・解明し得たこと、そして、その情況から藤巻末の讃辭について、その表現の深層なるものを追求したことによって、玉髪物語の色好みの世界の解釈と鑑賞——享受——に一步の深まりはなし得たと、私自身は思っている。

註1 新講源氏物語下巻八五頁。

註2 「しか／＼のことをそそのかししかど、中宮かくておはすれば、ここながらの覚えには、びんなかるべし。かのおとどに知られても、女御かくて又さぶらひたまへばなど、思ひ乱るめ

りし筋なり。……」(行幸卷一二七頁)と、源氏は、紫上に語っている。

註3 「この宮つかへを、しぶく／＼にこそ思ひたまへれ。宮などのれんじたまへる人にて、いと心深きあはれをつくし、いひ悩ましたまふに、心やしみたまふらむと思ふになむ心苦しき。」

(藤袴卷一六三頁)と、源氏は、夕霧に語っている。

註4 右の源氏のことばに対する応答。藤袴卷一六三頁の、夕霧のことは参照。

註5 多屋頼俊博士「光源氏と朧月夜尙侍」(国語と国文学昭和三十三年八月号)参照。

註6 玉上琢弥先生「角川書店刊日本古典鑑賞講座源氏物語」二三四頁。

註7 「なほさる御心ぐせなれば、中宮なども、いとうるはしくやは思ひきこえたまへる。事に触れつつ、ただならず聞え動かし

などしたまへど、やんごとなき方の及びなさに煩らはしくて、おり立ちあらはしきこえたまはぬを、……」(螢卷五一頁)。

註8 「『宮仕さまにもおもむきたまへらば、女御などのおほさむ事もあぢきなし』とおほせど……」(行幸卷一四三頁)。

註9 「父おとどは、『なか／＼めやすかめり。殊にこまかなる後見なき人の、なまほのすいたる宮仕に出で立ちて、苦しげにやあらむとぞうしろめたかりし。志はありながら、女御かくて物したまふをおきて、いかがもてなさまし』など、忍びて宣ひけり。」(真木柱卷一七六頁)。

註10 稻賀敬二氏の示唆による。

付記 本稿は昭和三十六年十一月十一日、広島大学国語国文学会において発表したものに手を加えたものである。(昭和三十六年十一月二十五日)

大阪府立春日丘高校教諭